

創刊にあたって

1995年4月、京都大学大学院農学研究科生物資源経済学専攻が発足した。ここに機関誌である「生物資源経済研究」創刊号をおくる。

本専攻は農学部旧農林経済学教室と旧農業簿記研究施設を統合したものであるが、前者は1924（大正13）年に、後者は1958（昭和33）年に創設され、70有余年あるいは約40年の間、農・林・水産業にかかわる経済研究にとりくみ、理論的・実証的研究に多くの寄与をなしてきた。今回の研究組織の改正では、われわれのおかれている研究・教育環境が大きく変わりつつあることを踏まえて、新たに8分野に再編成した。ここでの改革のキーワードは地域資源、環境、情報、国際化とし、生物資源をめぐる産業活動の発展と生態環境保全との調和に関して国際的視点から研究を深めていこうとした。これは21世紀前半を見据え、関連の諸科学の総合化によって研究活動を展開していくことをねらいとしている。そして本誌を専攻教官の成果の発表の場とし、これをもってわれわれ専攻のアイデンティティーを世に問おうとするものである。

戦後50年、国民経済という経済的枠組みは大きく変わろうとしている。多国籍企業の発展は経済のグローバル化を推し進めており、このような中にわが国の農・林・水産業がおかれている。生物資源の生産は土地・自然に左右され、不安定を免れない。地域資源の保続的管理が必要な所以である。しかし、先進諸国では生産力の増進によって地力の収奪や生態系の破壊など歪みが進行しているし、発展途上国においても熱帯雨林の過剰伐採、地下水の使い過ぎ、漁業における乱獲など保続的管理というには程遠い。限られた資源と環境という地球的制約条件のもとで人類の貧困、不平等をいかに克服するか、われわれに課された問題は大きい。

本誌はグローバル経済下の世界の、日本の農・林・水産業はもとより地域資源問題の解明のための仮説とその実証にあたる共同研究の場であり、これを世界にむけて発信しようとするものである。読書子の鞭撻と叱正を希望する。

1995年12月

京都大学大学院農学研究科
生物資源経済学専攻主任

村 鳶 由 直